大崎から悠久の地 平泉へ

世界文化遺産 平泉紀行

世界文化遺産として登録された岩手県平泉は、大崎市と歴史的にゆかりのある街。その歴史を学ぶことで、大崎から平泉への旅もさらに魅力あるものになるはず。

平泉・黄金文化のはじまり

安倍氏と源頼義・義家親子の戦い「前九年合戦」。安倍氏が滅びたこの戦いのとき、藤原清衡の父、経清は安倍氏に加担していたため殺されたが、清衡は母が敵方の清原武貞と再婚したため命を助けられた。のちに清衡は家督相続争いの「後三年合戦」に巻き込まれるが、またしても奇跡的に生き延びる。

その後清衡は長く続いた戦から非戦を決意。平泉に館を移し『中尊寺』を建立。ここから約100年にわたる平泉の黄金文化が幕を開けることとなる。

義経討伐から奥州藤原氏の終焉

時は平安時代末。兄・源頼朝と対立した源義経は、藤原氏三代秀衡を頼り奥州へ赴く。その逃亡の途中に通ったという伝説が残るのが、現在の大崎市鳴子温泉。そもそも鳴子という地名は、旅の途中にうまれた義経の子が産声を上げた「啼子（なきこ）」が転じたものとも言われている。無事平泉に身を寄せた義経だったが、頼朝は奥州藤原氏に義経の引渡しを要求。秀衡の子・泰衡は、父の「義経を擁護して鎌倉と対決せよ」との遺言に従っていたが、義経追討の宣旨を拒みきれなくなり義経を襲撃、自害に追い込む。泰衡は義経の首を鎌倉へ送達したが、頼朝は義経を長くかくまっていたことを罪として奥州征伐へ出兵。泰衡は平泉に火を放ち逃亡の後、家臣の造反により落命する。こうして奥州藤原氏の栄華は幕を閉じることとなった。

おくのほそ道

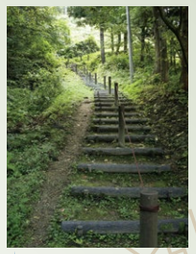
～芭蕉の歩いた道を訪ねて～

日本を代表する紀行文学「おくのほそ道」を記した松尾芭蕉。彼が辿った足跡・おくのほそ道を、新緑や紅葉の季節にウォーキングしてみましょう。

～尿前の関から封人の家～ 歩いて辿った山越えの旅

一 尿前の関から小深沢

芭蕉が鳴子を訪れたのは、「おくのほそ道」の旅に出てから47日目のこと。しかし「尿前の関」に辿り着くも通行手形を持っていなかったため、関守に怪しまれてなかなか通過を許されなかった。芭蕉が通過に手こずったこの関所跡が、小深沢に至る道のスタート。



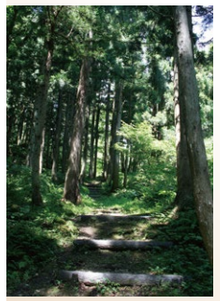
二 小深沢から大深沢・中山宿跡

「出羽街道中山越」は標高が低く、比較的越えやすい峠だった。そのため仙台藩は軍用の要衝として沢を越える道にも橋をかけることなく、旅人には難所として知られていた。芭蕉が歩いた当時はけもの道のようなわずかな踏み跡を頼りに歩いたとされている。現在、ウォーキングに適した道に整備されている。

【コース所要時間】小深沢～大深沢　約20分
大深沢～中山宿跡　約50分

三 山神社から軽井沢・封人の家

「出羽街道中山越」の中で一番歩きやすく、ロケーションの変化を楽しめるのが「山神社」から「封人の家」までのコース。木漏れ日に照らされた、ゆるやかな起伏が続く明るい道には東屋やベンチもあるので、森の中でのひと休みも格別。どんどん進み、芭蕉たちが雨のため3日間足止めされた「封人の家」が現れたところで約10キロの旅が終了する。



【コース所要時間】尿前の関～小深沢　約20分

【コース所要時間】 山神社～軽井沢　約20分／軽井沢～封人の家　約40分